書評 本康宏史著『軍都の慰霊空間：国民統合と戦死者たち』

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2017-10-02
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 能川, 泰治, Nogawa, Yasuharu
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000059

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

〔書　評〕

本康宏史著『軍都の慰霊空間―国民統合と戦死者たち―』

能川泰治

はじめに

まず、本書の課題と視角を確認することからはじめたい。本書の冒頭には、「本書は、このような『軍都』という視点から近代の都市をとらえなおすとともに、とりわけ戦死者をめぐる『慰霊空間』の歴史的な特色をとおして、軍事的な諸条件を背景とした都市構造の問題を検討するものである」（1頁）と記されている。この部分からも、本書が近代都市史研究の前進を目指して書かれたものであり、「軍都」と「慰霊空間」が、本書全体を通じた主張に関わるキーワードであることは明白であろう。そこで、各々のキーワードが意味するところを確認しておこう。まず「軍都」とは何か。本書の序論は「日本近代の都市形成史・発達史を考える際、軍隊の駐留ならびに軍事関連施設の存在は極めて大きな要素のひとつといえよう」（1頁）という書き出しで始まっており、別の箇所では「軍都」とは師団等の軍隊やその関連施設の存在が構造的な影響を与えている地方中核都市であるとの概念規定がなされている（22～23頁）。次に「慰霊空間」とは何か。これについては、やはり序論に、忠魂碑・軍人墓地・招魂社・護国神社等の、戦死者の慰霊行為を営む特定の場所が「慰霊空間」であることを示したうえで、「本書では、戦死者慰霊に関する施設の立地と展開（廃止・移転など）が、近代都市においてどのような様相をみせるのか、『軍都』に特徴的な、師団管下の『陸軍墓地』および『招魂社』等を軸にみてみることにする」（2頁）とある。これらのことから窺えるように、本書は「軍都」という概念を用いることによって、近代都市の形成過程において軍隊とその関連施設の存在が決定的に重要な意味をもつことを提起すると同時に、その軍隊関連施設として「慰霊空間」を分析することによって、慰霊行為を通じて国家神道等のイデオロギーがどのように浸透していったのか、都市空間がもつ国民統合機能を明らかにしようとするものなのである。さらに、注目すべきことは、本書が一貫して金沢という地方都市を研究対象にしている点である。「軍都」と「慰霊空間」という視角及び研究対象としての地方都市は、いずれも従来の近代都市史研究では蓄積の浅い問題領域であり、これらの問題に意欲的に切り込んでい

こうとする著者の姿勢に、評者は多大な関心と共感を覚えた。それでは、「軍都」と「慰霊空間」という視角を用いたことによって、近代都市史研究と戦没者慰霊研究はどこまで前進したと言えるであろうか。そして、金沢が「軍都」であることは、どこまで明らかにされたであろうか。以下、右のような評価軸を設定したうえで、評者の感想を述べることとしたい。

一　本書の構成と主要論点

本書の内容構成と主要論点を確認しよう。本書の内容構成は以下の通りである。

序論、「慰霊」の場をめぐって―軍事都市と死のトポス

第Ⅰ編、「軍都」論と「慰霊空間」

第一章、「軍都」論／第二章、「城下町」から「軍都」へ／第三章、「軍都」における「慰霊空間」の諸相

第Ⅱ編、「招魂」の空間

第一章、招魂社の創設と招魂祭／第二章、明治紀念標の建設／第三章、招魂社の変遷／第四章、護国神社の創設と展開／補論、台湾神社の創建

第Ⅲ編「慰霊」のコスモロジー

第一章、陸軍墓地の創設と展開／第二章、忠霊塔及び忠魂堂建設運動／第三章、「慰霊空間」と民衆意識

第Ⅰ編では、「軍都」を分析する視角としての都市類型論が述べられ、更に全国各地の「軍都」の成立過程が検証される。そのうえで、金沢の「軍都」としての空間変容について、幕末に中心の空洞化と周辺への軍事施設拡大が進んでいた金沢は、明治前期に広大な城地・武家地の軍用地への転用が進み、そして日清戦後の六個師団増設に伴う第九師団司令部の旧金沢城設置を機に、近代的な「軍都」へと再編されたことが展望される。

第Ⅱ編では、金沢における招魂社の創設と展開について、卯辰山に創設された当初の招魂社が、戦没者に対する藩（県）・藩士・遺族の慰霊祭祀に終始するものであったことが示されたうえで、その招魂社が日清戦争前後と十五年戦争期を経て戦力確保と戦意高揚のための民衆統合システムとして機能する過程が詳述される。ここで特に興味深いのは、日清戦争前後の時期になると、慰霊祭祀に祝祭としての要素が加わり、場所が兼六園の明治紀念標即ち日本武尊像の前に移動しているという点である。これとの関連で、日清戦後の招魂祭の場となった日本武尊像の果たした役割について、その建設過程に関する緻密な考察が加えられ、天皇崇拝心を定着させるための視覚装置として機能したこ

とが指摘される。また、一九三〇年代における招魂社の市内中心部への遷移を進めた運動については、その推進主体が連隊区司令部と在郷軍人関係者であったことが明らかにされ、「県民一般の宿望」に応えて遷移がなされたとする俗説への批判が加えられる。さらに、招魂社を移転改築して戦没者慰霊を恒久化しようとする地域の動きに対して、内務省は一九三九年に一府県一社制を原則とする内務省令一二号で護国神社への改称再編を促し、以後中央の官僚による統制の下で、国家主義的イデオロギー発揚の場として護国神社は機能したとされる。

第Ⅲ編は、金沢の陸軍墓地における各墓碑の成立事情を概観し、都市民衆の空間意識や慰霊に関する習俗と信仰を論じたものである。まず陸軍墓地については、北越・西南戦争戦没者の合葬慰霊碑から支那事変戦没者忠霊塔に至る、各墓碑の成立事情が考察される。そして、「軍都」における都市民衆の空間認識として、陸軍墓地の置かれた野田山と招魂社の置かれた卯辰山が、それぞれ「死」と「再生」を象徴するコスモロジカルな空間として認識されていたとの説明がなされる。そして最後に、慰霊に関する習俗と信仰について、戦勝祈願を名目とする弾丸除け・徴兵逃れ信仰に関する豊富な事例が紹介されている。

二　本書の成果

さて、右のように本書の主要論点を理解したとき、本書の成果として確認できることは何か。評者の考えを以下に述べよう。第一に、近代都市史研究において「軍都」という新しい問題領域を開拓した点である。近代都市の軍事都市としての性格に注目することの重要性は以前から示唆されてはいたが、本書ほど多くの頁数を費やして豊富な事例の発掘と整理に取り組んだ研究は未見である。特に第Ⅰ編で都市類型論として「軍都」を論じ、国家的政策による都市の序列化と歴史的形成過程の差異に注目する視点を提示したことは、ともすれば一つの都市の内部構造分析に傾斜しがちであった従来の都市史研究に対して、都市間序列と比較というダイナミックな視点を提供したと言える。

第二に、戦没者慰霊研究に関する貢献度である。戦没者慰霊に関する研究は、近年盛んになりつつある研究分野で、本書で「慰霊空間」とした招魂社・護国神社や軍人墓地についても実証分析の成果が積み上げられつつある。そのような状況の中で、フィールドを金沢に特定して、戦没者慰霊施設の設立と展開を幕末維新期から十五年戦争期まで論じたことは、戦没者慰霊研究が前進するための貴重なケー

ススタディを提供していると言えよう。

最後に確認すべきことは、戦没者慰霊施設の設立と展開を論じたことが、同時に金沢の近代史を「軍都」と「慰霊空間」という視点で捉え直したことになっているという点である。その意味で、金沢の近代史研究に対する本書の貢献度は大きい。また、本書を読んで敬服するのは、実に多くの史料を発掘・整理している点である。その中には今後の研究を進めるうえで、注目されるべきものが多い。特に、第Ⅲ編で紹介された慰霊に関する習俗と信仰の事例は、戦争と民衆の関係についての社会史的分析を深めるうえで、貴重な素材となるであろう。

三　疑問点・問題点
―「軍都」と「慰霊」をどう論ずるべきか―

しかしながら、以上のように本書の成果を認めたとしても、「軍都」と「慰霊空間」という視角によってどこまで徹底した分析がなされているかという点について、不満が残るというのが評者の感想の結論である。第一に、近代都市の捉え直しと都市構造の検討を本書の課題として掲げておきながら、近代都市史研究に関する総括的な整理がどこにも見当らない。また、序論では「社会史的な方法・視点を、これまでの近代日本都市史研究にどのように活用することができるのか、改めて問われなければならない課題といえよう」（4頁）と記されてある。それでは、近代日本都市史研究の現状と課題を著者はどのように理解し、如何なる問題点を克服するために社会史的な方法・視点が必要であると考えているのか。さらに、従来の都市史研究には、本当に社会史的な方法・視点が活用されてこなかったのか等々の疑問が生じるが、本書はこれらの疑問に一切答えてくれない。

第二に、金沢の「軍都」としての性格はどこまで明らかにされているであろうか。もともと「軍都」という視角には、軍隊とその関連施設が都市形成にもつ意味の重要性を提起する含意があったはずである。ところが、本書ではその軍事関連施設として「慰霊空間」を素材に選び、しかもその国民統合システムとしての機能を明らかにする方向で議論が展開されている。そのこと自体が本書の特色なのではあるが、果して慰霊施設の設立・展開とその統合機能を論じることで、軍隊とその関連施設の存在が都市形成に及ぼす影響力の大きさはわかるのであろうか。そもそも当時の金沢市政では慰霊施設の設立をめぐってどのような議論が交わされたのであろうか。また、第九師団や慰霊施設の

存在は、金沢のインフラ整備や市民生活にどのような影響を与えているのであろうか。このように、「軍都」という場合に想起される、あまりにも素朴な問題領域に殆ど言及することなく、「慰霊空間」が論じられているので、金沢が「軍都」であることが明らかにされているとは言い難い。その意味で、大正末期の連隊移駐と周辺住民の関係（7～8頁）の分析が、史料的な制約等の理由で事例の紹介にとどめられているのが惜しまれてならない。

第三の問題点は「慰霊空間」の論じ方についてである。本書では、招魂社・護国神社と軍人墓地が素材になっていることは既にふれたが、これらを総じて「慰霊空間」とする分析視角はどこまで活かされているであろうか。気になるのは、本書では招魂社・護国神社と軍人墓地が各々個別に論じられていて、相互の関係や役割分担が論じられていない点である。例えば、第Ⅱ編の第三章で金沢の招魂祭について、明治後半まで招魂社のある卯辰山における儀礼的な招魂祭と、市内中心部の兼六園における祝祭的な招魂祭とが同時並行で催されていたことが指摘されているが、両者が如何なる関係にあるのかという点については全く言及されていない。ここでは、卯辰山が招魂祭の会場として狭くなったから市の中心部へ遷移したとする、俗説の論破に力点が置かれていて、両祭典の関係については「むしろ、両方の祭式の関係の方が気になるところである」（205頁）とされているだけで、本格的な考察はなされていない。つまり、本書では招魂社・護国神社と軍人墓地それぞれを個々の「慰霊空間」として論じていて、個々の慰霊施設を含むこんだ「慰霊空間」総体としての機能や、個々の施設の役割分担が問われていないのである。しかし、それでは、個別に実証分析が蓄積されてきた招魂社・護国神社と軍人墓地を、「慰霊空間」として分析することの意味は何なのかという疑問が生じる。

次に確認すべきは、本書では「慰霊空間」を国民統合システムとして分析している点である。しかしながら、その国民統合の様相は明らかになったかどうか、大いに疑問を感じざるを得ないというのが第四の問題点である。まず、統合される側、即ち民衆の動向について、殆ど全くと言ってよいほど言及されていない。さらに、金沢における招魂社の創設と展開を論じた第Ⅱ編では、「慰霊空間」を国民統合システムとして分析しようとしていながら、その国民統合に大きな意味をもつ日露戦争に殆ど言及することなく、日清戦争から十五年戦争へと議論を飛躍させていることは大いに疑問を感じる。そこで、民衆の動向や日露戦争に関

する議論を欠落させたことで生じた問題をいくつか挙げておこう。まず、村上重良の研究によれば、日露戦中戦後になると全国各地で民間有志による招魂社・記念碑が続々と建設されるようになり、これに対して内務省は日露戦時中に「境内紀念碑建設取扱方の件」を通牒し、同一記念碑は一市町村内に一ヵ所にまとめるように指示したという（村上重良『慰霊と招魂』（岩波新書、一九七四年）149頁）。ここから明らかなように、地域における建碑・顕彰ブームとそれに枠をはめようとする内務省という図式は、本書では一九三〇年代に顕在化したかのように述べられているが、日露戦後の段階で既に顕在化しているのである。それでは、地域における戦没者慰霊の取り組みは、なぜ一市町村一ヵ所又は一府県一社という形で統制されなければならないのであろうか。また、戦没者慰霊をめぐる地域の取り組みや国家の統制は、民衆をどこまで統合していたのであろうか。断片的なものでしかないが、評者の手元にある史料で論点を提示してみよう。

あゝ我が父は何の為に戦死せしや豈に大屈辱大不名誉の講和を買はんが為めならんや若し此の屈辱此不名誉にして忍びたらんには何を以て父に対し夫に対し将兄弟に対せんあゝ彼等をして犬死に帰せしめたるものは誰なるか（戦死者遺族）

（『北國新聞』一九〇五年九月九日）

右は日露講和条約調印以後、講和反対世論が沸騰する中で、読者から寄せられた投書を引用したものである。『北國新聞』は石川県の地方紙であるが、政府系新聞を除く各紙は、こぞって読者からの講和反対を訴える投書を掲載して世論を煽動した。注目すべきは、これらの投書を通覧した場合、右の引用にあるように、この屈辱的な講和によって家族・知人の死が「犬死」になったという非難が意外に多い点である。それでは、戦時中に国家や地域の取り組みとして戦没者慰霊がなされていながら、このような批判が噴出することの意味をどう考えればよいであろうか。まず、確認すべきことは、戦没者慰霊の取り組みをすれば、民衆は即統合されて国家の思うがままにコントロールされるほど単純な存在ではないということである。講和の内容如何、おそらく戦果が具体的に生活向上に直結するものでなければ、出征者の死は「犬死」と見なされるのである。ただし、そのことは民衆に「国民」としての自覚が根付かなかったことを意味するのではない。なぜなら、日比谷焼打事件では、民衆は「国民」として政府を攻撃しているからである（拙稿「日露戦時期の都市社会」（『歴史評論』五六三号、

一九九七年)。これらの事実は、少なくとも日露戦後の段階では、戦没者慰霊の取り組みは国民統合システムとして十全に機能していたとは言い難いことを意味している。戦没者慰霊を国民統合論で検討する場合、何のために慰霊祭祀に取り組むのか、その取り組みがどこまで民衆を統合していたのかが、厳密に検討されねばならないのであり、その際には戦時下とその前後の時期における民衆を取り巻く状況が考察されねば評価を下すことはできないのである。

以上、本書に対する批判に力点を置いた書評となってしまったが、本書が「軍都」と「慰霊空間」という分析視角を提起したことの意義まで否定しようというのではない。本書の問題提起に刺激を受け、本書で開拓された問題領域が更に深められる一助になればと思って、敢えて無いものねだりのような批判をした次第である。評者もその一端を担う近代都市史研究に限って言えば、「軍都」と「慰霊空間」という視角は、今後広く共有されるものとなるであろう。その先駆的研究として、本書が広く読まれることを願って止まない。

(二〇〇二年三月刊、吉川弘文館、八〇〇〇円)

(金沢市弥生一―二六―七　弥生町宿舎三四号)